平成三十一年度入学者選抜学力検査問題

（前期日程）

国　語

（注　意）

1　問題紙は指示があるまで開いてはいけません。

2　問題紙は本文一〇ページです。答案用紙は三枚あります。

3　答えはすべて答案用紙の指定のところに記入しなさい。

4　字数制限のある解答欄への記入に際しては、句読点を一字と数えなさい。

5　マス目のある下書き用紙の様式は二五字×三四行（八五〇字）です。答案用紙の一行あたり字数や総字数の指定とは異なる場合があるので、注意して利用してください。

6　問題紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

一　次の文章は、戦時中から日本占領下の上海に滞在し、敗戦後も残留していた安野という人物について描いたものです。安野は中国を踏み台にしてあわよくばヨーロッパに渡りたいという願望を抱き、中国語を勉強しようとするものの、様々な問題が起こり長続きしません。これを読み、後の問いに答えなさい。

隣家の、以前に大酒呑みの林女士がいた部屋へ劉という大学生が引っ越して来た。林女士そのものについては、台湾へいったという話であった。この劉青年が安野に英語を教えてくれと云って来た。それで安野は英語と交換に、中国語の勉強をはじめからやり直すことにした。第四回目であった。

この青年は、虎を捕えることが好きだったり、はじめて十分もするとブランディをもって来たりは毛頭せず、極めて真面目で几帳面な人であったから、今回は長続きがしそうであった。けれども、今度は安野自身に故障が起きた。故障といっても外的な何かではなくて、毎日劉青年と向き合って二時間ばかりを過ごすとなると、安野は己自身の精神的混乱が、劉青年という鏡にはっきりと写っているのをまざまざと見る思いをするのであった。四声法(注1)の発音を無限に直され、かつは彼が英語を教える段になると、RとLとの区別を劉が見事に発音し分けるのに驚いたりしながら、この中国の青年が、彼には彼なりの悩みがあるとしても、安野のように、中国に事実いながらなお世界を西欧と日本という風に考えがちであるという、そういう間の抜けた悩みを悩んでいなかった。劉は安野が買いあつめた洋書類を指さして、こんなキュウクツな集中生活をしながらも、勉強をオコタらぬとは、日本人は矢張りえらい、と云った。

しかし安野にしてみれば、これらの洋書類にたよってなにごとかをやらかそうというつもりの方が先なのだ。えらいどころか、実は戦後の世界でつかえるべき新しい主人をさがしまくっている奴隷である。奴隷の勤勉さである。短期間にしろ、実際に見聞し経験した中国と、戦争の全体を考え詰めるよりも、西欧の新知識をあわててかき込んだ方が得になる、という、一種の習性にも近いさもしさが否定しがたく存在した訳である。その頃彼は、日本のある作家がその中で西欧との対決を試みた非常に長い小説を読んでいた。そしてその中に描かれた対比が、たとえば神社にある御幣の形と、数学の集合論の対比といった形で行われ、西欧と日本は両者相殺して、読めば読むほどその対比が一種の真空地帯、乃至は絶対的な脆弱さ、しかもその脆弱さこそ

がいのちであるといったものを生んでゆくことに驚嘆した。劉青年がTHIS IS A MANというのと、自分がTHIS IS A MANというのとでは、まるで内容が違うのではないか。劉青年の英語はどしどし進歩したが、安野はいつまでたっても四声の発音さえろくに出来なかった。

四六年(注2)の初夏、ある新聞社の主催で、白沫如(マッジョ)、冒頓、夏炎、馮(フウ)大越その他の中国の代表的詩人、作家、評論家、歴史学者などの人々による、日本問題座談会が催された。安野は劉青年につきそってもらって傍聴に出掛け、(3)チクイチ発言を通訳してもらった。傍聴者は中国人日本人の両者を含めて多数に上り、狭い部屋は人いきれがした。そこでまた安野は痛烈な衝撃をうけた。

主題が日本問題という、多分に政治的要素を含んだ広汎なものであったせいもあろうが、これら詩人文学者たちの発言は、日本流に云えば徹頭徹尾〈政治的〉というほかなかった。そのことにも驚かされたが、発言者、特に白沫如氏は、戦時中の日本文学界の諸大家の動きや党派のあり方を、びっくりするほど的確に知っていた。そしていちいち名をあげてその行状を述べ、これを中国の漢奸(かんかん)(注3)文学者とともに並べて、聞いている安野が首筋に寒いものを感じるほど猛烈に(4)ダンガイした。大東亜文学者大会(注4)などで活躍したある作家については、ペンネームと本名までも区別して知悉(ちしつ)していて、左翼だった頃の動きや転向(注5)の仕方などまで論じた。劉青年の英語による通訳は甚だたどたどしくてもどかしかったが、それでも、『彼等は断じて日本民衆の痛苦を書きはしなかった(They never wrote the suffering of Japanese people)』と、眼鏡の奥の大きな眼――恐らく平素は柔和な情愛にみちた光をたたえたものであろうが――を、ぎらぎら輝かせ、広いがっちりした肩をぶるぶる顫(ふる)わせて怒る白氏を、安野は殆(ほとん)ど怖れようとした。冒頓氏は、撫(な)で肩で身体つきも細く物腰もやわらかで、どちらかと云えば女性的な感じのする人であったが、それでも蒼白(そうはく)なこけた頬がしまいには血紅色を呈するほどに、日本文学者の民衆に対する背信を難じた。他の人たちもまた同断であった。次から次へと出席者は烈(はげ)しい発言をつづけていった。安野はいたたまらなくなって、訝(いぶか)しがる劉をおきざりにして会場を出てしまった。

彼らのあの怒りに対しては、如何なる理由も理由にならぬ。どんなに時間がたってもあの怒りは決して角がとれたり、ましてや話せばわかったり、磨滅したりはしない。世代が更新しない限り、或(あるい)は日本に革命的な変化が来ない限りは、中国文化を担う

人々との溝通(注6)は不可能だ。というのが、ひとり外へ出て空を仰いだときの安野の感想であった。彼はまた、本当に怒った人を、生れてはじめて見た、とも思った。

しばらく夢中で町を歩きまわり、やがて彼は大島のところへ足を向けた。大島があの座談会へ来ていなかったことが不思議に思われたのだ。更には、夢中で歩きまわっていたとき、彼もまた我是(注7)ゴリラぁ、ウォーシーゴリラぁ、うおーッ、うおーッと両手をさし上げて喚きたい衝動に駆られたせいもあったかもしれない……。

顔を見るなり、

――どうしてあの座談会を聞きに来なかったんだい？

と聞こうとして安野は、C はッと口をつぐんだ。机がわりのリンゴ箱に積み上げられた書籍や雑誌が彼の眼を射たのだ。

結局、彼は白氏のものにしろ冒頓氏のものにしろ、実は殆ど読んだことがないのである。読んだこともなくて、つまり詳細確実な知識も何もなしで、彼は実は代表的文学者の顔を、要するに見物にいったにすぎないのである。知識がないからこそのこの出掛けてゆけた、とも云えよう。そして彼らの見幕にびっくり仰天してコドモのように逃げ出して来た。このびっくり仰天は、しかし、詳細確実な知識に支えられていないのであるから、底はさして深くない筈である。いつか忘れてしまわぬとも限らない。

大島が買い物に出掛けた留守、安野はねころんで積み上げられた本を眺めていた。その中に一冊、「在日本獄中」という薄い本が眼についた。

在日本獄中、とは、これもまったくただならぬ題の本だな、と思って抜き出し、ぱらぱらまくってみた。当り前のことであるが、漢字ばかりがぎっしりつまっていた。そして日本語の読めない中国人が平仮名をとばして漢字だけ拾って読むように、とにかくはじめの方を少し読んでみた。妙な感じがした。いつのまにか彼は起き上って熱心に読み出した。

書いた人は謝秀英という女流作家であった。「女兵士」という作品が日本語に訳されているというくらいのことは、安野も知っていた。

その本は、この作家が昭和九年日本にいた時、東京の某警察署に拘留されたことがあり、その時の状況を激烈な怒りを以て(5)コクメイに描き出したものであった。何しろ助詞その他、日本語ではあまり見かけぬ漢字は全部すっとばし、知っている漢字だけを拾ってゆくのであるから、読んでみてなどと口幅ったいことも云えぬ訳であるが、彼に、妙な感じ、を起させ、ついには起き直らせたものは、この本に登場する、中国文学を研究している若い日本人たちについてのところであった。謝女士は、親しくこの人たちとつきあい、その中の一人とは、家庭の中にもたちまじるほどである。その一人、その日本人青年が、どう見ても大島その人なのである。家庭の状況が、大島がそれまでぽつりぽつりと話したところと大体同じだったし、家の構造も似ていた。要するに登場人物の年齢を十年ほど若返らせて考えればいいのである。そして大島が、かつて中国人の関係した、左翼的な事件にひっかかって逮捕されたことがあることは、安野も既に承知していた。直接訊ねた訳ではなかったが、戦争中、週一回は必ずやってくる私服の憲兵と大島との会話を横で聞くだけで事足りた。ここに描かれた人物は、大島そのひとではないか……。

著者はその捲添えをくって逮捕された(大島)のその後の運命に思いをはせ、いたく心を痛めていた。悪虐無道な日本帝国主義は、かの優秀な青年を虐殺しはしなかったか、と、心から憂えているのである。そして特高係の無智蒙昧なこと、無礼さ加減や嗜虐的なまでの残忍さなどに対する、歯ぎしりや、滲む血の色が見えるほどの憎悪と怒りが、よく解らぬながらに活字に牙を生えさせていた。しかもその憎悪と怒りが、かの優秀な青年たちによせる、遥かなる愛情の裏打ちになっていた。

安野は本を閉じて瞑目した。他の本同様に、その本もまことにお粗末な製本で、表紙には風呂屋のペンキ絵のような桜の花が描かれていた。目をひらいて表紙を見ていると、その拙い花びらから、しと、しと、と血がしたたってくるような感じがした。その桜花の奥には、先刻の座談会で見た、冒頓氏の、血紅色に燃え立った憎悪があり、白沫如氏のぎらぎら光る眼がそこから安野を、そして日本の知識階級そのものを凝視しているのである。しかもそのもう一つ奥の方には、憎悪の火と同じ熱度の愛情がある……。

大島がかえって来た。

「これ、あんたのことか。」

「おれたちのことだ。」

大島の話によると、謝女士は大島の入れられた監房のななめむかいにあたるところに入れられていた。そして、女士は格子を握りしめて終日喚き叫び、呶鳴り、バカヤロと連呼し咆哮したという。

「これがあんただとすると、あんたはたいへんな愛情につつまれていたということになる。昭和九年以来ずうっとだ。」

「おれだけじゃねえ。みんなだろうが。……たいへんだよ。」

それを承知していれば、矢張りのこのこと、代表的文学者の面を見物、になどゆけぬ筈であろう。

D 恐しい断層がある。そしてこの断層は生きている。どんなに力持ちのトラでもゴリラでも、ひとまたぎやふたまたぎで飛び越せない。

安野の中国語勉強は、いままでの例になく長続きした。はじめてからもう一ヵ月になろうとしている。けれども劉青年は、先生としてはまことに厳格至極で、四声の発音が完全に出来るまでは、会話や読本に入ろうとしなかった。しかも安野には、なんとしても四声がうまく云いわけられなかった。

ある日、ぱたりと劉が来なくなった。伝言も何もなかった。何か急用が出来たか、と思っていたが、二日たっても三日たっても音沙汰なかった。その頃上海には、人生の持続感を突然打ち壊すような事件が頻々と起っていた。五日目の夕刻、そういう事件がどこで待ち構えているかわからぬことにはっきり気付き、彼は隣家へ出掛けていった。主人も知らなかった。荷物も置いたきりで、どこへ行ったともわからなかった。

第四回目の中国語勉強も、これでだめになってしまった。彼は買いだめた洋書類の上にちょこんとのっかった中国語教科書を眺め、また長いあいだぼんやり壁の世界地図を眺めていた。中国語はとうとうものにならなかったが、日本とヨーロッパしか念頭になかった彼の世界地図は完全に変貌していた。E

（講談社文芸文庫編『戦後短篇小説再発見9』講談社、二〇〇二年、七八～八五ページ、堀田善衛「断層」一部改変の上、引用。初出は一九五二年。）

（注1）　四声　中国語の発音における声調。
（注2）　四六年　一九四六年。
（注3）　漢奸　日中戦争（一九三七～一九四五）下で日本に協力したとして厳しく批判され、裁判などにかけられた者がこう呼ばれた。
（注4）　大東亜文学者大会　第二次世界大戦中、戦争協力のために開催された文学者の大会。
（注5）　転向　ここでは共産主義者・社会主義者が、政府の圧力の結果その思想を放棄すること。
（注6）　溝通　意思疎通すること。
（注7）　我是　中国語で「私は～である」の意味。

〔問一〕　傍線部(1)～(5)の片仮名を漢字に直しなさい。

〔問二〕　傍線部A「精神的混乱が、劉青年という鏡にはっきりと写っている」とはどういうことか、また傍線部B「さもしさ」とはどういうことを指しているか、それぞれ簡潔に記しなさい。

〔問三〕　傍線部C「はッと口をつぐんだ」とあるが、この時安野が思い当たったことを述べなさい。

〔問四〕　傍線部D「恐しい断層がある」について、「断層」の内容を、誰と誰の間にあるものかを含めて述べなさい。

〔問五〕　傍線部E「彼の世界地図は完全に変貌していた」について、ここで安野の精神にどのような変化が起こったのか述べなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

兼好法師、秋の頃思ひ立ちて、二たび東に下り侍りしに、鳴海潟を過ぎ行き侍るほど、A われにひとしき世捨て人の、蓮の葉笠を打ちかたぶけ、先立ちて行くを、「いかなる人なりけむ、道のほども語らばや」と思ひて、追ひつきてみれば、見し人のやうなり。互ひに面がはりやしぬらむ、しばしよくよく見れば、そのかみ、いづちともなく失せ給ひし万里小路藤房の大徳なりけり。大徳も「兼好の法師にこそ。いかに」とて、ともに笠を脱ぎて休らふより、かしこの小御堂に立ち寄りて、こしかたを語りあはするに、大徳、「自らはやう菩提に心ざしありしを、君あながちに召しまつはさせ給へるままに、しばしと、B 本意にもあらで過ごしけるほどに、おのづから折々の違ひ目に捨てはつべき世を思ひ知りて、かくはなりぬるにこそ。C 今はなかなか何事も心にまかせぬれば、住まひをも定めず、身をやすく行きめぐりて、仏にも心ざしを運びぬるになむ」と語られければ、兼好、「自らも故院の上の隠れさせ給ひし時より、身を用なきものと思ひなりて侍れば、のがれもはつべく心ざし侍りながら、年ごろ、とかく障へられしかど、D つひにかくはなりにて侍り。まことに、のがれつる身はひとしくこそ侍りけれ。さて、今も東の方にさぞらひ行き侍るになむ」とて、互ひに後の世の道など聞こえてほどをふるに、短き秋の日のはやかたぶきければ、つきぬ名残を思ひ捨てて、又めぐりあふべき事をちぎりて、泣く泣く別れ行きけり。兼好はそれより東に行きて、ほどなく都に帰り侍りぬ。

（『兼好諸国物語』巻五第三十二条による）

（注）
○大徳――僧の称。
○菩提――悟りの境地。
○君――天皇。
○さぞらひ――「さすらひ」に同じ。

〔問一〕 傍線部A「われにひとしき世捨て人」とは、だれのことか、「世捨て人」となる前の名前で答えなさい。

〔問二〕 傍線部B「本意にもあらで過ごしける」とは、どういう「過ごし」方であったというのか、またその原因は何であるというのか、簡潔に説明しなさい。

〔問三〕 傍線部C「今はなかなか何事も心にまかせぬれば」とは、どのようなことができているというのか、四〇字以内で説明しなさい。

〔問四〕 傍線部D「年ごろ、とかく障へられしかど、つひにかくはなりにて侍り」を、「かく」の指すことを明示して、現代語訳しなさい。

三　次の文章は、南宋の陸游が乾道六年（一一七〇）に任地の蜀に赴いたときの日記のうち、十月十四日の記述です。これを読んで、以下の問いに答えなさい（設問の都合で送り仮名を省いたところがあります）。

十四日、留駅中。晩以小舟渡江南、登山至江瀆南廟。新修未畢。

a 蓋江絶於天聖中、至是而復通。然灘害至今未能悉去。若乗十二月・正月水落石尽出時、亦可併力尽鑱去鋭石。然灘上居民、皆利於敗舟賤売板木、及滞留買売、必揺沮此役。不則賂石工、以為石不可去。須断以必行。乃可成。又舟之所以敗、皆失於重載。当以大字刻石置駅前。則過者必自懲創。二者皆不可不講。当以告当路者。 X b Y

（陸游『入蜀記』による、一部省略）

（注）
○駅――宿場のこと。
○江瀆南廟――江瀆廟は川の神を祀（まつ）る神社のこと、北岸と南岸に社があり、北廟（びょう）南廟といった。
○新修――乗っていた舟の底が壊れたため新たに修理を始めたこと。
○天聖――北宋の仁宗のときの年号。一〇二三～三二年。
○至是――皇祐三年（一〇五一）に一度改修工事がされたこと。皇祐も仁宗のときの年号。
○灘――水の流れが悪い浅瀬のこと。
○鑱去――取り除く。
○揺沮――騒ぎ立てて妨害する。
○懲創――戒める。
○当路者――責任者。

〔問一〕 傍線部a「蓋」、傍線部b「若」について送り仮名を含む読み方を平仮名で答えなさい。

〔問二〕 傍線部X「至今未能悉去」を訓読し、それを平仮名で書きなさい。（現代仮名遣いで書いても良い。）

〔問三〕 傍線部Y「二者皆不可不講」の二者を明らかにして現代語訳しなさい。

〔問四〕 陸游の時代においても灘の害が続くにも関わらず、再び改修工事がなされないのは何故か、陸游の考える理由を一〇〇字以内で書きなさい。